

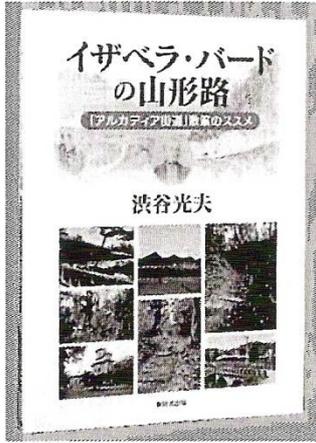
味読 郷土の本

評者 錦啓

(エッセイスト・南陽市)

130年ほど前の明治時代、英国人女性旅行家イザベラ・バードが旅した山形路を現代のわれわれがたどるのに格好の案内書がこのたび出版された。本書の出現によって、金坂清則京都大学院教授の提唱する、過去(バード)の旅行記と現代の旅を重ね合わせ、二つの時空を楽しむ「ツイン・タイム・トラベル」の魅力が大きく広がった。

著者の渋谷光夫氏(山形市)はもと小学校教員。資料渉猟に独特の嗅覚をもち、豊富な資料を使いこなし、優れた授業を展開した。社会科教育、総合的な学習の全国的なリーダーであった。こうした力量が本書に十分に発揮されている。本書の執筆は氏にとって総合的な学習そのものであったろう。人はどのようにしてライフワークに出会うかを物語る書でもある。



渋谷光夫著「イザベラ・バードの山形路」

過去と現在の旅 重ねる魅力

本書は2章から成る。第1章は、バードに関する県内の記念碑、バードの経歴や訪日目的、旅が成功した要因などを叙述。旅の達人、友愛の国際人としてのバード像を鮮明に浮き上がらせる。第2章は、小国から金山までの200キロを11区間に分け、それぞれ最古と最近の地形図を比較。街道の古絵図・高橋由一の石版画・写真・当時の文献などを援用して、バードの歩いた道筋を明らかにするとともに変貌ぶりを解説する。

渋谷氏はバードの旅行記を精読しながら、またバードが通った道を踏査しながら、例えば「バードはなぜ米沢盆地を激賞したのか」「市野々ではなぜバードの思いが通じなかったのか」などさまざまな疑問に出会う。こうした疑問に対し渋谷氏は実に明瞭に自分の考えを述べる。この足取りの軽さが心地よい。

バードが諜報的使命を帯びていたに違いないという思考の提示も興味深い。こうした説はこれまでなかったわけではないが、バードの情報収集の仕方、時代背景、度重なる訪日などから分析しており、説得力が増したと言えよう。バードの旅行記を読み解くとき(通りすがりの異邦人が書き残した紀行エッセイにすぎないことを、肝に銘じておく必要がある)。

本書を読みながら赤坂憲雄氏のこの言葉(雑誌「北の旅学 やまがた」より)がよみがえった。バードはおもしろいだけに扱い方がむずかしい。

(無明舎出版・1800円)